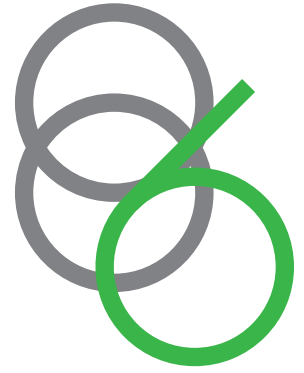


# 平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター  
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字 松井一實  
広島平和文化センター会長

## 若者が世界の議論に参加する — NPT再検討会議へ



平和首長会議コース  
(国連総会議場にて)



ペース大学で  
学生・教員との  
ディスカッションを行う  
平和首長会議コース



国連国際学校で  
ギャラリーウォークに参加する  
平和首長会議コース



NPT再検討会議コースフォーラムを  
主催する平和首長会議コース



国連で中満事務次長へ  
「核兵器禁止条約」の早期締結を求める  
署名を手交する平和首長会議コース



UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)を  
訪問する平和首長会議コース

## 目次

写真・若者が世界の議論に参加する — NPT再検討会議へ .....	①	新しいユース・ピース・ボランティアの役割—内外での平和発信への参画—	⑦
「広島平和記念資料館の展示と子どもたちの心理的反応」(上手由香) ...	②	ホノルル市でヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展を開催/ 「広島市・安芸郡外国人相談窓口」をご利用ください/ 「ひろしま留学生基金」にご協力をお願いします .....	⑧
被爆体験記「被爆とともに歩んだ人生」(桑原一之) .....	③		
「ヒロシマは訴える」コーナーリニューアルオープン .....	④		
ミュージアムショップ「PEACE CREATION FACTORY」が新装オープン/ 第11回NPT再検討会議へ平和首長会議代表団を派遣 .....	⑤		





## 広島平和記念資料館の展示と 子どもたちの心理的反応 — 新たな子ども向け展示に向けて —

上手 由香

広島大学大学院人間社会科学部 准教授

〔かみて ゆか〕

博士(心理学)、臨床心理士・公認心理師

被爆体験が子や孫の心に及ぼす影響について研究  
著書に『世代継承性研究の展望: アイデンティティから  
世代継承性へ』(ナカニシヤ出版)

広島平和記念資料館（以下、資料館）は、小中学生が修学旅行で初めて訪れる機会も多く、広島の児童・生徒にとっても、平和教育の重要な場となっています。資料館の展示は、被爆の実相を伝えるうえで欠かせないものですが、その内容には、悲しみや恐怖といった強い感情を引き起こしやすい側面もあります。実際に、「怖くて展示を見ることができなかった。」という声や、館内に入れず外で待つ子どもの姿も見受けられます。

被爆の実相を学ぶ過程で、こうした心の揺れはある程度避けられないものです。しかし、その大きさや、子どもたちが展示をどのように受け止めているのかについては、これまで十分に検証されてきたとは言えません。また近年、資料館の入館者数は大きく増加し、館内の混雑も課題となっています。特に、修学旅行で訪れる児童・生徒にとって、限られた時間の中で十分に展示と向き合うことが難しい状況も生じていました。

こうした背景から、子どもたちが落ち着いて見学できる環境を整えるため、資料館地下1階に新たな平和学習展示を設置するための検討会議が始まりました。私は検討委員の一人として、子どもたちが資料館の展示をどのように受け止め、それが平和への意識にどのような影響を与えるのかを明らかにするための調査を実施しました。

本調査は、2025年7月から8月に実施し、広島市内の小・中・高校生（計29名）を対象に、展示見学の前後と約1か月後の3時点でデータを収集しました。調査では、アンケートと個別インタビューを行いました。

アンケート調査の結果からは、展示見学直後には、学年に関わらず「元気」「やる気」といった前向きな気分が低下し、「悲しさ」「怖さ」といったネガティブな気分が高まる傾向が見られました。しかし、これらの変化は、1か月後には見学前の状態に戻っていました。平和や命の大切さへの意識については、いずれの学年においても、展示直後・1か月後ともに高い水準を維持していました。また、資料館への来館意欲については、1か月後の調査時に、高校生では「また見たい」という意欲が高まる傾向が見られたのに対し、小・中学生では、「怖いから見たくない」といった回避的な気持ちや、「必要だとは思いますが積極的ではない」といった葛藤が見ら

れました。

インタビューの分析からは、年齢による受け止め方の違いがより明確に示されました。小学生は視覚的な刺激に強く反応し、身体的・感覚的な恐怖を直接的に体験する傾向がありました。また、「自分の家族だったらどうしよう」と、自分や家族に引き寄せて想像するなど、原爆による被害との心理的距離が近い特徴が見られました。一方、高校生では、放射能による被害の長期的影響まで含めて理解することで、「その日で終わらない怖さ」といった、より深い意味づけが見られました。

1か月後の反応としては、いずれの学年でも日常生活への大きな影響は確認されませんでした。小・中学生では展示内容をふと思い出すことが多く、特に小学生では就寝前の想起や悪夢などが見られる傾向がありました。一方、高校生ではこうした想起は少なく、8月6日や終戦記念日、それに関するメディアなどの外的なきっかけによるものが中心でした。

以上の結果から、展示は子どもたちにとって、日常生活に大きな支障を及ぼすものではないものの、一定の心理的負担を伴うことが示されました。一方で、年齢が低いほど感覚的な記憶や恐怖が持続しやすいこと、展示の内容によってストレスの度合いが異なることも明らかとなりました。ただし、本調査の参加者は、もともと平和学習への関心が高い層に偏っている可能性があるため、本結果はこうした特性を持つ子どもたちの反応として解釈する必要があります。

これらを踏まえ、現在進められている子ども向けの平和学習展示では、「選択展示」の取り入れが検討されています。これは、子ども自身が展示を見るかどうかを選べる仕組みであり、刺激の強い内容は段階的に提示するなどの工夫を行うものです。自ら選択することは主体的な学びにつながり、安心して展示と向き合うことを支えます。また、不安や怖さを感じた場合の対処方法や、学校、家庭でのサポートについても情報提供を行うことで、より安心して子どもたちが被爆の実相を深く学ぶことができるのではないかと期待しています。

原爆の展示とはどうあるべきか、そこに一つの正解を導き出すことは困難です。被爆の実相を伝えること、子どもたちの心を守ること、そして平和について深く考える機会を保障すること。そのいずれもが大切であ

り、さまざまな立場からの思いが重なります。だからこそ、平和の学びが恐怖だけで終わるのではなく、理解

や共感を経て、未来につながるものとなるよう、私自身も考え続けていきたいと思います。(2026年5月)



## 被爆体験記

### 被爆とともに歩んだ人生

桑原 一之

本財団被爆体験証言者

〔くわばら かずゆき〕

国民学校2年生であった7歳の時、爆心地から約1.5km離れた、分散授業所となっていた寺の本堂で朝の掃除をしていたときに被爆

私は1937年生まれです。幼い頃、戦争の中で育ち、食料や生活物資は配給制となり、いつもお腹を空かせていました。

父は広島市内で和菓子屋を営んでいましたが、1943年、34歳で招集されました。私は6歳でした。出征前、父と母と私は三人で広島護国神社を訪れ、無事を祈って別れました。それが最後の別れとなりました。

戦地から私宛に来たハガキには、「元気で勉強してくださいね。」と書かれていました。その後、父が戦死したという知らせが届きました。

戦争は人権を無視し、なんの感情もない野蛮行為です。父は出征までは商売で忙しく、私は父にどこかへ連れて行ってもらった記憶もなく、とても残念です。

1945年、私は爆心地から約1.5キロのところにあるお寺に通っていました。8月6日の朝、私はお寺の本堂にいました。

そのとき、ものすごい音と閃光があり、窓ガラスの破片が飛び散りました。驚く間もなく、体はとっさに逃げようと動き、本堂の階段を降りようとしたのですが、階段は吹き飛んでなくなっていました。私はその場から飛び降りました。腰を打ちましたが、家に早く帰りたい一心で、お寺を出て無我夢中で歩きました。

歩いている人々は何も話さず、その顔は皆、放心状態でした。やがて大勢の人の流れの中に入り、軍用トラックに乗せられ、爆心地から約9キロ離れた海田国民学校へ運ばれました。

そこには全身やけどを負った人や、床に倒れている人が大勢いました。その中で私は、じっと様子を見ているしかありませんでした。

翌日、避難者をお世話されていた方が「あなたは小さいから私の家に来なさい。」と優しい言葉をかけてくださり、家で食事と飲み物をいただきました。そして「お父さん、お母さんが迎えに来なかったらうちの子供になりんさいね。」と言われました。

1週間ほどお世話になったある日、突然母が訪ねてきてくれました。母から聞いた話では、比治山に登る道筋には藁で編んだ敷物の「むしろ」を被せた遺体が数百

体あり、一つ一つ「むしろ」をめくって私を探したそうです。母の顔を見て大変安心するとともに、ここまで探し迎えに来てくれたことに、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

海田駅から広島駅まで汽車で帰り、広島駅からは、がれきの中を母と歩いて帰りました。途中、自宅から50メートルほど手前の家の縁側に、同級生の女の子がいました。その子は丸裸で全身に白い粉薬を塗られ、痛みのためか横にもなれず座ってじっとしていました。この光景は今でも忘れることができません。その子は、おそらくお寺の外の墓の近くにおいて、直接熱線を浴びたため、ひどい火傷を負ったのではないかと思います。その後、彼女は亡くなりました。私はお寺の中において、彼女は外にいたという違いで、運命を分けたのだと思いました。

比治山の自宅に帰ると、祖母は無事でしたが、家は半分開くらい壊れていました。窓ガラスは割れ、無数の破片が家の中の仏壇の扉に突き刺さっていました。また、神棚の柱が折れていたことを覚えています。

母は原爆投下の瞬間、隣家の奥さんと軒先で立ち話をしていた、ものすごい音と閃光に思わず手を取り合ったそうです。母はわずかに建物寄りにいたため無事でしたが、その奥さんは1週間後に亡くなられました。

戦後は祖母と母、私の三人の生活が続きました。母は体が不自由な祖母の世話をしながら働き、女手一つで私を育ててくれました。経済的にも大変な中でしたが、母は優しく、いつも私のことを考えてくれていました。

その後、私は就職し、結婚しました。

当時は原爆投下から年月が経っていましたが、被爆者に対する差別や偏見はなお根強く、将来への不安を感じることもありました。そうした中でも、妻はそれらを気にすることなく結婚を決意してくれました。今も心から感謝しています。

結婚後は子どもにも恵まれ、穏やかな生活を送ることができましたが、原爆の影響がいつ現れるのかという不安は、常に心のどこかにありました。

戦争と被爆を体験した者として何ができるのかを考え、地域に貢献する道を選びました。50代から子ども会の支

援など地域活動に取り組み、町内会長や学区の社会福祉協議会会長などを務めました。

私は84歳の時、多発性骨髄腫になり、原爆の後遺症であると認定されています。被爆者は今もなお、心と体に不安を抱えながら生きています。

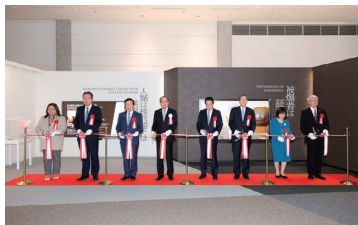
これまで私は、被爆者であることを自分から積極的に話してきませんでした。しかし、被爆者として体験を語らないことが申し訳ないという思いから、証言活動を始めました。戦争は人権を無視し、なんの感情もない野蛮行為です。争いは何も生まないということを、皆さんに知っていただきたいと思います。相手の立場に立って考え、話し合いで解決することが大切です。皆さんが平和に幸せな人生を過ごすことができるよう願っています。

## 「ヒロシマは訴える」コーナー リニューアルオープン

令和8年（2026年）3月28日、広島平和記念資料館東館1階に「ヒロシマは訴える」コーナーがオープンしました。

このコーナーは、資料館本館展示を見終えた来館者が、核兵器の非人道性への理解を更に深め、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて、自分たちに何ができるのかを考える場として整備したものです。オープン当日は、東館地下1階メモリアルホールでオープニングセレモニーを行い、岸田文雄元首相をはじめとした国会議員や松井一実広島市長が出席しました。

また、中満泉 国連事務次長兼軍縮担当上級代表からの「来場者は、この展示室を歩くことで、単に核兵器について学ぶだけでなく、その人的被害を目の当たりにし、なぜ核兵器を廃絶しなければならないのかを理解できます。」というメッセージを紹介し、当財団の谷史郎副理事長が展示の趣旨を説明しました。



オープニングセレモニーの様子  
(写真提供 広島市)

「NO MORE HIROSHIMAS」の看板が大きく掲げられている様子が写されています。戦後間もない時期から、広島が世界に向けて発してきた平和への訴えを伝えるものです。

続いて、86インチの大型



展示室の様子

モニター2台で、被爆者の証言映像とスライドショーを紹介しています。

1台目のモニターでは、「被爆者は証言する」と題し、約6分間の映像で9人の被爆者の証言を紹介しています。被爆者が描いた「原爆の絵」も交えながら、核兵器の使用が都市や人間にどれほど壊滅的な被害をもたらすのかを伝えています。被爆当日、建物疎開作業



巨大な溶鉱炉 森下弘作

に動員され、爆心地から1.5kmの距離で被爆した森下弘さん（当時14歳）は、原爆のさく裂の瞬間を「全体が大きな真っ赤に燃えたぎっている高熱の溶鉱炉の中に投げ込まれた。そういう感じでした。」と映像の中で証言しています。また、8月6日入市・被爆し、6度目のがんを患っている新井俊一郎さん（当時13歳）は、「原爆の影響は、80年前に終わったのではなく、現在も日本中にいる被爆者全員に、私のような影響を及ぼしています。」と証言しています。さらに、爆心地から2.5kmの自宅で被爆した八幡照子さん（当時8歳）は、「絶対にこういう惨事にみなさんをあわせたくないという思いがいっぱいです。」と語っています。

2台目のモニターは、「人類は核兵器とは共存できない」というタイトルで約5分のスライドショーが展開します。被爆者の粘り強い取り組みやそれが原動力となった、2010年NPT再検討会議最終文書での「核兵器の使用がもたらす壊滅的な人道上的結末」への言及、核兵器禁止条約の成立、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）のノーベル平和賞受賞など国際社会の動きを伝えています。

一方で、世界には今なお多くの核兵器が存在し、核軍縮は停滞しています。核兵器使用の危険が現実味を帯びる中、ヒロシマとして、核兵器のない世界の実現を共に目指していくことを強く呼びかけています。

また、モニターの横には、日本被団協が受賞したノーベル平和賞のメダル（複製）を紹介し、展示の最後には、来館者が平和のために自分にもできる行動の一つとなるよう、当財団が実施する平和文化の振興事業のための寄附箱を設置しました。

リニューアル後、東館2階から階段を降りてきた来館者が足を止め、被爆者の証言映像に見入る姿や、スライドショーを見ながら意見を交わす海外からの来館者の姿も見られます。資料館本館展示で被爆の実相に触れた人々が、このコーナーを通して被爆者の訴えを改めて受け止め、平和のために何ができるのかを考え、行動するきっかけとなることを願っています。

(平和記念資料館 学芸展示課)

## ミュージアムショップ「PEACE CREATION FACTORY」が新装オープン

令和8年（2026年）3月5日、広島平和記念資料館東館1階に「PEACE CREATION FACTORY（ピース・クリエーション・ファクトリー）」がリニューアルオープンしました。

今回のリニューアルは、来館者の増加に対応するとともに、売り場面積の拡充と商品の充実を図るために行ったものです。売り場面積は以前の約2倍となる約80平方メートルとなり、店内は落ち着いた木のぬくもりを感じ



木のぬくもりを感じるデザインで統一された店内の色調でまとめられています。ミュージアムショップは、広島平和記念資料館の展示を見終えた来館者が最後に立ち寄る場所であり、平和に関する商品を手に取り、平和への思いを深め、その思いを日常に持ち帰っていただく場でもあります。

「PEACE CREATION FACTORY」の店名サインは、



店名サイン「PEACE CREATION FACTORY」

広島市西区三篠町にある株式会社歴清社が扱う錫箔すずはくを使用し、銀色に仕上げています。爆

心地から2.2kmで被爆した同社の倉庫（久永金紙押紙工場）は、現存する被爆建物の一つであり、店名サインにも、広島れきせいしやの記憶とつながる縁を大切にしたいという思いが込められています。

店名は、平和記念公園及び広島平和記念資料館を設計した丹下健三氏の言葉に由来しています。丹下氏は、「平和は自然からも神からも与えられるものではなく、人々が実践的に創り出してゆくものである……いま、建設しようとする施設は、平和を創り出すための工場でありたいと考えた。」と述べています。ミュージアムショップの商品は、帰宅後、日常生活の中で平和を想起するきっかけとなるなど、来館者の心に「平和の砦とりで」を創造する役割を果たすとの考えから、店名を「PEACE CREATION FACTORY（ピース・クリエーション・ファクトリー）」と名付けました。

今回、新たなオリジナルグッズ12種類を開発しました。新商品には、慰霊碑を中心に平和記念公園をモチーフにしたマグネット、折り鶴をあしらったボールペンやステッカー、平和記念公園の地図に慰霊碑や原爆ドームなどのシールを貼るセット、平和記念公園の眺望や広島平和記念資料館をデザインしたクリアファイルなどがあり

ます。これらは、（公財）広島平和文化センターの職員がデザインを考案して制作しました。クリアファイルの裏面には、「力や恐怖ではなく、様々な違いを乗り越えて、人類の共通の価値を大切に



新たに加わったオリジナルグッズ

ショップを訪れた人からは、「広がって店内が明るくなり、良い雰囲気になった。」という声がありました。

なお、ミュージアムショップの売上は、令和7年度には2億7,260万円となり、前年度の1億9,804万円を大きく上回りました。こうした収益は、来館者の平和への願いが込められた貴重な財源として、（公財）広島平和文化センターにおける平和発信事業の強化に生かしていきます。

広島平和記念資料館の展示はもとより、商品を通じて平和への思いを伝えていくため、今後も順次、来館者の目線に立って、オリジナルグッズを充実させ、平和を願うヒロシマの心を大切に持ち帰っていただけるショップを目指していきます。（平和記念資料館 運営企画課）

## 第11回NPT再検討会議へ 平和首長会議代表団を派遣

米国・ニューヨーク市で開催された第11回NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議へ、松井一實まつい かずみ平和首長会議会長（広島市長）、鈴木史朗すずき しろう副会長（長崎市長）及び香川剛廣かがわたくひろ事務総長（本財団理事長）等から成る代表団を派遣しました。

### NGOセッションでのスピーチ

開会の挨拶で、グテーレス国連事務総長は、NPTは世界の破滅を防ぐためのものであるが、記憶は薄れ、その精神は蔑ろにされているとして、核軍縮に再び息吹を吹き込む必要があると訴えました。

また、NGOセッションで、松井会長は鈴木副会長と共に平和首長会議の代表としてスピーチを行いました。スピーチでは、現在、世界各地で多くの武力紛争が続き、核兵器使用のリスクがかつてなく高まる中、市民が際限のない不安を抱えながら日々を送っている現状を指摘しました。その上で、NPT体制の重要性を再確認するとともに、各国政府代表に対し、核抑止に依存しない真の平和の実現を願う市民社会の声



NGOセッションでの松井会長と鈴木副会長

を受け止め、対話による外交努力を通じて、核軍縮・不拡散を誠実に前進させるよう求めました。

### 核保有国代表、国連関係者等との面会

緊迫する国際情勢の中、核保有国4か国を含む多くの各国政府・国連代表者等との意見交換を行いました。それにより、いずれの国においても、非人道性の観点から、核兵器は人類を滅ぼしかねないものであることは共通認識となっており、核兵器のない世界を願っていること、そのため、NPT体制の重要性を認識していることが確認されました。平和首長会議としては、核保有国に対し、NPT第6条の義務を誠実に履行するよう求めるとともに、この要請が国境を超えた市民社会の切なる願いであることを強調しました。グテーレス国連事務総長ほか面会者からは、平和首長会議の国際的な平和活動に対する期待の声が寄せられ、改めてその意義と重要性を認識しました。今後の活動展開のさらなる原動力にしていきます。

### UNIDIRとのサイドイベントの共催

また、UNIDIR（国連軍縮研究所）フェローで本財団の専門委員を務める河野 勉<sup>こうの つとむ</sup>氏に助力いただき、今回初めて平和首長会議とUNIDIRとの共催で、「NPTの現状を振り返る」と題するサイドイベントを開催しました。具体的には、これまでの再検討プロセスにおける



サイドイベントの様子

取組の成果と課題を振り返るとともに、NPTが今後も国際社会において意義ある枠組みであるための方策について議論を行いました。

ロビン・ガイスUNIDIR所長の司会進行によりイベントが開始され、まず、3名のパネリストがプレゼンテーションをしました。

まず、UNIDIRから参加した中東非大量破壊兵器プロジェクトのチェン・ザック・ケイン主任は、AIなど新技術が新たな課題を生んでおり、核の拡散リスクを高める可能性もあり、その対応策としてIAEAの査察体制強化などがあると述べました。

次に、広島市立大学広島平和研究所の<sup>おおしたしゆん</sup>大下 隼 講師は、「放射線治療などの原子力の平和的利用のための途上国向け技術協力は、彼らのNPTの運用上の不満を緩和してきた。これが核軍縮の誠実交渉義務の進展不足を覆い隠さないよう、国連軍縮部にNPT事務局の設置を提案する。」と発言しました。

続いて、元国連軍縮局職員のリャンディ・ライデル氏は、「核兵器国と非核兵器国の間に深刻な乖離が存在しており、この度の会議において最低限、各々の基本義務

を再確認することが重要である。」と発言しました。

最後に、司会が、NPT体制が大きな圧力に直面している中でも、なおその維持・強化が不可欠であると強調し、会を締めくくりました。

なお、サイドイベント終了後の松井会長とロビン・ガイス所長との面会において、今後とも平和首長会議とUNIDIRの間の連携強化を図っていくことが確認されました。

### 平和首長会議ユースフォーラムの開催

広島平和研究所の<sup>おのの</sup>大下 隼 講師の司会進行の下、同会議のサイドイベントとしてユースフォーラムを開催しました。

広島なぎさ高校の2名は、被爆者の森下弘さんのことばから「戦争を生み出したのは人間です。しかし、平和を生み出すのも人間です。」と引用し、「行動し続ければ、何かが変わります。」と訴えました。



ユースフォーラムの様子

ノートルダム清心高校の2名は、「核抑止に頼らず、対話や国際交流を通じて相互理解を深めることが重要である。」と発表しました。広島大学附属高校の2名は、「核兵器の危険性について、科学的・実証的な観点から人々に警鐘を鳴らし続けなければなりません。」と訴えました。

発表後のディスカッションでは、互いの平和活動内容を共有するためのプラットフォームが必要だとの聴講者からの意見に対し、国連軍縮部の職員は、軍縮への若者の関与の必要性や人や組織のつながりの重要性に触れ、幅広く情報共有できるプラットフォームを整備する予定であると発言されました。また、核軍縮における理想と現実のギャップをどのように埋めていくべきかとのユースからの問いに対しては、国連軍縮部の研修生から「広島・長崎は素晴らしい取組を行っており、この場にいること自体が意思決定者への影響につながっている。」との激励の言葉が寄せられるなど、活発で有意義な意見交換が行われました。

今回の派遣を通じてユースは、核兵器問題や平和構築に関する多様な視点に触れ、平和は国や立場を越えて共に築いていくべきものであることを改めて認識することができました。また、「国際情勢が厳しい今だからこそ、広島から核兵器の危険性を訴え続けたい。」との声も聞かれ、自らの役割や社会との関わり方について考えを深める貴重な機会となりました。平和首長会議としても、今後も若者が主体的に学び、考え、行動する機会を創出していきます。

(平和首長会議・国際政策課)



## 新しいユース・ピース・ボランティアの役割 — 内外での平和発信への参画 —

おかうえ おさむ  
岡上 修

公益財団法人広島平和文化センター 平和文化企画課 課長補佐

### 第1回ユース・ピース・ボランティア専門研修の実施

被爆から80年以上が経過し、被爆者の方々が高齢化する中、壊滅的な原爆被害の実相と核兵器廃絶を願うヒロシマの心を国内外に発信し続けるため、若い世代が積極的に参画していくことが課題になっています。

このため、(公財)広島平和文化センターでは、広島で学生生活を送る10名の大学生を対象に、核兵器の非人道性に関する深い理解や多様な背景を持つ人々と共に平和構築活動を広めるためのコンピテンシー(知識・スキル・姿勢)を身に付けるため、「第1回ユース・ピース・ボランティア専門研修」を初めて実施し、令和7年11月から令和8年3月まで10回にわたる核軍縮や国際関係論などの専門家による講義や討論、長崎視察などを行いました。また、その成果として、受講生が核兵器廃絶に向けた提言をまとめ、3月末に広島市長や被爆体験証言者、ヒロシマ・ピース・ボランティア等の出席の下、提言報告会を行いました。

提言では、SNSを使って若者による意識の変化を起こすことで核兵器廃絶に向けた政策を推進する、若者が平和について気



提言報告会(令和8年3月)

軽に話し合える場を設けるといった核兵器廃絶に向けた具体的な取組が示されましたが、今回、そうした提言を基に国際社会で核兵器廃絶を訴えるため、第11回NPT再検討会議に専門研修の受講生である安田女子大学3年生の植田真子さんと広島大学3年生の北園いろはさんを、高校生6名とともに平和首長会議ユースとして派遣しました。

### 第11回NPT再検討会議での活動

現地では、NPT再検討会議のサイドイベントとして国連本部で開催された平和首長会議のユースフォーラムに



ユースフォーラムでの様子

登壇し、提言について英語でプレゼンテーションを行ったほか、現地にある大学等を訪問し、若い世代同士で地域を越えて核軍縮に関する意識をいかに高めていくかなどについて話し合いました。

また、NPT再検討会議のNGOセッションや平和首長会議主催のサイドイベントを傍聴し、被爆地の訴えが国連の場で発信される瞬間を見守ったほか、中満国連事務

次長や市川軍縮会議日本政府常駐代表など、核軍縮や平和分野の第一線で活躍されている方々とも面会し、核兵器廃絶に向けて取り組む際のアドバイス等をいただきました。

派遣を振り返り、植田さんからは「平和のあり方について学ぶことができた今回の経験を活かし、私の中での軸である『平和について考えるきっかけを与えられる存在になれること』を大切にしながら、今後も発信を続けていきたい。」、北園さんからは「市民一人ひとりが身近なことからも平和について考え、声を上げ続けることで少しずつ社会の意識や価値観を変えていけるのではないかと感じた。」とのコメントが寄せられ、自分たちが国際社会で果たすべき役割などについて深く考える機会になりました。

### 専門研修の成果

専門研修では、受講生それぞれが核兵器廃絶という目標は共有しつつも、それを実現する手段や現在の安全保障環境の認識については意見が分かれる場面も多く、話し合いを重ねてお互いの考え方を理解し、粘り強く一致点を探りながら提言をまとめました。さらに、提言をNPT再検討会議等で発信し、若者同士で意見を交わすことで、核兵器廃絶に向けて国を越えた共通認識を見出すことができました。

それらのプロセスは、ある意味で、国際社会でこれまで行われてきた核軍縮や核兵器廃絶に向けた歩みを受け継ぐものであり、専門研修の受講生全員の努力によって成果に結実したものだと思います。

### 平和文化のバトンを若い人に託す

こうした経験を踏まえ、受講生のみなさんには、今後も若い世代の平和文化の担い手として活躍を期待しています。また、提言にあった「平和について気軽に話し合える場」については、早速今秋にも開催できないか検討しています。さらに、10月からは、第2回の専門研修を開始する予定です。

広島は、昭和24年(1949年)の広島平和記念都市建設法により、平和記念都市ヒロシマとなりました。その過程では、市民投票で90%を超える賛成がありました。平和記念都市を完成するにはまだまだ時間が必要です。それを進めるのは若い世代の皆さんです。これからも、ユース・ピース・ボランティア活動全体を通し、平和文化のバトンを若い世代に託していきたいと考えています。

(平和文化企画課)

## ホノルル市でヒロシマ・ナガサキ 原爆・平和展を開催

被爆80周年に当たる令和7年度、日本が米国をはじめとする連合国との間の降伏文書に調印した戦艦ミズーリの記念館（米国ハワイ州ホノルル市）において、令和7年8月12日から令和8年2月28日までヒロシマ・ナガサキ原爆・平和展を開催し、市民や観光客など228,940人と非常に多くの方が来場しました。

展示の内容は、動員学徒として作業中に被爆し犠牲となった中学生が原爆投下時に身に付けていた腕章をはじめ、中身が黒焦げになった弁当箱の複製、ハワイ出身のオバマ元米国大統領の折り鶴など、資料20点のほか、広島・長崎の被爆の実相を説明した写真パネルなどで、被爆者証言ビデオの上映、折り鶴ワークショップ、VRゴーグル体験などを併せて行いました。

現地時間の8月12日に開催された開会行事では、広島市の中井幹晴副市長が、「戦争によって市民社会にもたらされた悲惨な結末を確認していただきたい。」「核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現に向け、ともに力を尽くし行動して参りましょう。」とのメッセージを発信しました。



ハワイ式の伝統的な祝福の儀式の様子

その後、高等女学校1年生の12歳の時に爆心地から3.5km離れた自宅で被爆された笠岡貞江さんが、写真や絵を紹介しながら、ご自身の体験を語られると、終了後には、ひととき大きな拍手とスタンディングオベーションが送られ、「核兵器は廃絶されるべきだ。」「悲劇を繰り返してはいけないというとても力強いメッセージだった。」といった声が寄せられました。



戦艦ミズーリ記念館で体験を語る笠岡貞江さん

また、広島出身者からなる日系人ネットワークの協力により、ホノルル市民に広く被爆の実相を知ってもらうため、パールハーバー国立記念公園、本派本願寺ハワイ別院、ハワイ大学マノア校、プナホウスクール、ハワイ大学ヒロ校で、被爆体験講話や原爆写真ポスター展などを展開しました。

今回、原爆・平和展を見学した来場者のアンケートでは、「写真や映像を通して、核爆発が起こると何が現実に起こるのかを実感しました。」「原子爆弾の危険性とそれが無実の人々に与える影響に衝撃を受けました。」「展示は、犠牲者に対する悲しみを抱かせ、核兵器に対する恐怖を感じさせるものでした。」「人類にこのような破壊的な力は必要ありません。」「次の世代を育てていくうえで大変意義深い経験でした。過去から学び、より明るい未来へと進んでいけることを願っています。」などの感想が寄せられました。

(平和首長会議・国際政策課)

## 「広島市・安芸郡外国人相談窓口」 をご利用ください

広島市と安芸郡4町（府中町、海田町、熊野町、坂町）に住む外国人市民のみなさんにご利用いただける相談窓口を開設しています。

中国語、ベトナム語、ポルトガル語、スペイン語、英語、フィリピン語で対応できる相談員が、行政機関への各種届出や困りごとの相談に応じます。

また、広島市へ引っ越してきた外国人市民のみなさんへ、相談員が広島市での新しい生活に関する情報を提供します。ぜひご利用ください。

【連絡先】TEL (082) 241-5010

E-mail : soudan@pcf.city.hiroshima.jp

【場所】広島国際会議場3階 国際市民交流課内  
(中区中島町1番5号 平和記念公園内)

【時間】月曜日～金曜日の午前9時～午後4時

【対応言語】中国語、ベトナム語、ポルトガル語、スペイン語、英語、フィリピン語ほか（フィリピン語は金曜日と第1と第3水曜日のみ）

【休室日】土曜日、日曜日、祝日、

8月6日、12月29日～1月3日

このほか、出入国在留管理局職員による出張相談も行っています。毎月第2金曜日の午後1時30分から午後4時まで。事前予約制です。



詳細はこちら  
(国際市民交流課 HP)

## 「ひろしま留学生基金」にご協力をお願いします

本財団では、私費で広島に来ている留学生の支援のため、皆様から寄せられる寄附金を「ひろしま留学生基金」として積み立て、それを財源として「ひろしま奨学金」を支給しています。「ひろしま留学生基金」への皆様の温かいご支援をお待ちしております。

基金へのご寄附に関するお問い合わせ

(公財) 広島平和文化センター  
国際部国際市民交流課 ひろしま奨学金担当

〒730-0811 広島市中区中島町1番5号

(広島国際会議場3階)

TEL (082) 242-8879

HP <https://h-ircd.jp/scholarship.html>



詳細はこちら  
(国際市民交流課 HP)

### 「ひろしま奨学金」とは

広島市内の大学・大学院等に在学し、かつ広島市内に居住する外国人私費留学生を対象に、昭和63年度（1988年度）より開始し、毎年30人の留学生に奨学金を支給しています。



令和7年度ひろしま奨学金奨学生決定書交付式の様子